

幼児のお話し作りからみえる言葉や思考の成長

高妻 弘子

Thought and language growth observed in the development of the ability of kindergarten child to make stories

Hiroko KOZUMA

I はじめに

人は人の中で生きていく。人と人とのコミュニケーションになくてはならないのが「言葉」である。しかしそれは大変複雑で、本当に伝えたいことが伝わっているのか考えることもあるであろう。社会人になるとコミュニケーションの方法はお互いの立場や関係性、性別などによってもずいぶんと違うものになってしまう。そんな中、自分の思いを確かに伝えていくためには思いに合った言葉を選び、組み合わせることが必要になる。気持ちに言葉を飾っていくのである。そのためには、簡単な言葉でも良いので少しでも多く使える語彙を獲得しておくことが良い。そして場面に応じた使い方ができる力をつけておくことがそれを手助けしてくれると考える。

語彙の獲得、豊かな言語表現、言葉の組み合わせなど、語彙が爆発的に増える幼児期、そのような力をどのようにつけてあげられるのだろうか。

幼児は、家庭では家族の中で、集団では友達や先生など人的環境を中心とした幼児を取り巻く全ての環境から刺激を受け語彙を広げていく。それは物の名称だけではなく、何がどうしたのか、その時どう感じたのか、嬉しい、悲しい、美しいなどといった感情とも密接な関係がある。「言葉を聞く・文字にふれる→名称や意味を理解する→使う」の一連の流れの中で成功や失敗を繰り返しながらその場に合った言葉が使えるようになっていくのである。

『幼稚園教育要領解説』（平成20年 文部科学省）では 第2章 第2節 4 言葉の獲得に関する領域「言葉」の大きな柱として「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」としており、下記の通りねらいを定めている。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

上記のことから分かるように、思いを自分なりの言葉で表現する楽しさ、伝える・聞く・伝え合う喜び、豊かな感覚の育成、絵本や物語などに親しみ先生や友達と心を通わせることが求められている。それはお話し作りの中で体験できるのではないだろうか。友達とお話を作る過程において語彙が広がり、意思表示や相手の思いを受け入れるやり取りが豊かな言語表現に繋がるのではないかと

考える。そこで、保育活動で行ったお話し作りに子ども達がどのように取り組んだのか、また、お話し作りを通してどのような言葉のやり取りがあったのか、その中で何が成長しているのかを探っていくこととする。

II 研究方法

本研究ではお話し作りを通して筆者が子ども達とかかわった事例をもとに言葉や思考の成長について具体的な検討を行なう。

III 対象クラス

K幼稚園 5歳児 2クラス（男児 17名、女児 24名）の幼児

※幼児の名前はすべてアルファベットで男児は○男、女児は○子で表すこととする

5歳児、活動時期は2月で就学直前である。自分の思いをはっきりと伝えられる子どももいるが、思いはあるがなかなか発言できない子ども、うまく言葉にできない子どももいる。また、文字に関してはすらすらと平仮名、カタカナが書ける子どももいるが、自分の名前を書くのがやっとですべての平仮名を読むことができない子どももいる。

グループ作りに関しては、まず、主人公（犬、猫、鬼、雪の妖精）を伝え、自分がどの主人公でお話しを作りたいか選ばせた。その中で一緒にお話し作りがしたい友達 10人程度のグループを作り、そこから言葉・文字に関する発達段階を考慮して5人（1グループだけ6人）ずつの8グループを作った。あらかじめ教諭がグループメンバーを決定しなかったのは自己決定することが意欲や積極性に繋がり、喜んで参加することが本物の達成感や充実感に繋がると考えていたからである。また、初めから5人グループにしなかったのは得意な子どもと苦手な子どもの偏りが出るのを防いだためである。

人数設定については、子どもが作るお話しの長さで全員が発言しやすくみんなの創意を取り上げやすいという点に配慮した。

今回はその中から2グループ（鬼グループ・猫グループ）の様子を事例研究することとした。

IV 実践事例

活動手順

- ①登場する主人公・画用紙の色を決める
- ②主人公を折り紙で折り、四つ切画用紙にテープで貼る（仮止め）
※主人公の位置や手足の動きが調整できるように仮止めとした
- ③画用紙に好きな絵を描く
- ④できた画用紙をグループの友達と見せ合う
- ⑤あらすじを考えながら順番を決める
- ⑥1ページずつみんなでお話しを作っていく（足りない部分を加える）
※自分の作品には自分で文字を書く
- ⑦表紙を作りお話しの題名を決める
- ⑧発表する

2月10日 ①②の活動

お話しに登場する主人公の統一（姿、大きさ、色等）を図るため、主人公は折り紙で折ること

にした。割と簡単に組み、身近な存在であることから犬、猫、それから時期的なもので鬼、雪の妖精の4つを紹介した。主人公の色や数、画用紙の色と向きを検討する時間を設けた。それぞれのグループで話し合いが始まる。どんなお話にしたいか早速話しているグループもある。

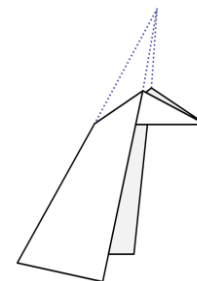
<鬼グループ>

はきはきと物事が言える女兒2人、男児1人とおとなしめの女兒1人、男児1人の計5人グループである。A子が「私、ピンクの鬼にしたい!」と口火を切った。すかさずB男が「鬼は赤がいい」と答える。するとC子が「私もピンクがいい」とA子に賛同する。D子が「私は黄色の鬼を作りたい」と遠慮がちに言った。みんなの様子を見ているだけのE男。そこで先生が「どうしてその色がいいと思ったの?」と声をかける。するとB男が「赤鬼は強いから赤がいいと思う」と意見を述べる。次にA子が「優しい鬼もいてほしいからピンクにしたかった」とポツリ言った。この一言を聞いてB男が「優しい鬼いいね。ピンクは優しい色だからピンクでいいよ」と答えた。A子の表情がぱっと明るくなった。そして「1人だけじゃかわいそうだから2人にして、もう1人を赤にしようか」と言うとB男はじーっと考えて「優しい鬼のお話しなら赤じゃない方がいいと思う」と答えた。そしてD子の黄鬼が採用され、B男が「折り紙もらってくる」と張り切って前に出ていった。

<猫グループ>

お話し好きな女兒4人と製作が少し苦手な男児1人の計5人のグループである。女兒が「何色にする」「猫ちゃん可愛いよね」なんて話している傍らで「難しいの嫌だな」とF男がつぶやく。それも耳に入らないほど女兒4人は盛り上がっている。先生が「F男君、何か困ってるんじゃないかな?」と声をかけると、F男の様子を確認しG子が「F男君、何色の猫がいい?」と聞いた。F男は「何でもいい」と答える。

折り紙はグループによって折るもの(主人公)が違うことからグループ毎の指導となった。今までの経験から、年長児にとっては比較的簡単な折り方だったこともあり、どのグループもスムーズに仕上げる事ができていた。苦手な子どもには得意な子どもが教える姿が見られた。斜めに折り返す部分を「このひらひらを手をばんざーいって上げるみたいに」と表現したり、中割折り(図1)を「こんにちは〜って押して引っ張る」と言葉にしたりしていた。



(イラスト: <https://ja.wikipedia.org/wiki/折りの技法> 最終閲覧 2018.1.11) 図1 中割折り

2月13日 ③④⑤の活動

まず、自分がどんな場面を書いたのかグループ内で話し、どの順番でお話を作るか話し合っ決めてようになげかけた。

<鬼グループ>

それぞれの描いた作品はA子「公園で遊んでいる」B男「家での豆まき」C子「幼稚園の豆まき」D子「歩いている」E男「散歩して転んだ」であった。それをつなげて1つのお話にするのである。公園で遊んでいる絵を描いたA子が「私1番がいい」と言った。するとC子が「その前に、公園に行くところがあつたほうがいいんじゃない」B男「どんなふうに行くかわからんもんね」と言う。それを受けて「じゃあ2番でいい。1番はD子ちゃんのやね」とA子。B男が「僕3番!」と手を挙げる。そして「4番がE男君、5番がC子ちゃんがいい?」と聞いた。冷静なC子が「E男君のは転んでるから歩いてる次がいいと思う…」と意見を出した。

E男もにっこり笑って頷いている。みんな納得だ。何度も場面を入れ替え、話し合いながらどうにか順番が決まった。最終的に決定したのは「歩いている」「散歩して転んだ」「家での豆まき」「公園で遊んでいる」「幼稚園の豆まき」である。

<猫グループ>

猫グループはF男「温泉」G子「ご飯を食べてる」H子「散歩」I子「外で遊んでいる」J子「公園で遊んでいる」場面であった。苦手なF男が緊張した表情で下を向いている。H子がF男に「それ何してるところ？」と尋ねると小さい声で「温泉」と答えた。すると「猫がおんせ〜ん」と言いながら大笑いした。F男は真っ赤な顔をしてうつむいている。先生が「みんなは温泉好き？」と声をかける。「好き！」「この前行った！」「広いんだよ」との感想を聞きながら「どんな気持ちだった？」と次の質問に入った。「楽しかった！」「気持ちいいかった！」「また行きたい！」…。自分のテーマを取り上げてもらい少しずつF男の表情も明るくなってきた。「猫ちゃんはどんな気持ちだろうね…」と言って先生はその場を後にした。子ども達は猫の気持ちになって楽しそうに話している。

2月17日 ⑥⑦

いよいよお話し作りである。順番やあらすじはだいたい決まっているので、みんなで文章を考えながら文字を書き込む作業となる。あわせて、主人公の位置、手足の動きを修正したり絵を描き加えたりして仕上げていく。

<鬼グループ>

- 1 場面：A子が「お散歩に行きましたでいいか」と言うと、「どこに行くか書いたほうがいいと思う」という意見が出ていろいろな場所が上がった。C子が「でも人間の家と公園と幼稚園にも行くんでしょ？」と冷静に発言。そこで「じゃあさ、お散歩じゃなくて冒険にしよう」という提案があった。行先は「人間の国」に決定。鬼は金棒を持っているが、この鬼は“優しい鬼で、日本に住んでいて、冒険に行く”との理由から日本の国旗を持たせることになった。
- 2 場面：転んだ鬼を見て「怪我しなかったの？」と素朴な疑問があった。そこで怪我をした場所が分かるように血を描き加えた。「涙は描かんと？」と言われ「痛かったけど我慢したから描かん」と答えたE男。D子のアドバイスを受け、絵に吹き出しを作り「いて」と書き加えた。優しい鬼を作りたかったA子がすかさず「ピンクの鬼に大丈夫だよって書いたら？」と提案していた。
- 3 場面：人間の家の豆まきは鬼が家を訪ねるところから始まった。豆を投げられ慌てて逃げると道に迷ったところから4場面につながる。
- 4 場面：歩いていると公園を見つけるが、5場面との繋がりに迷っている。B男の「この公園を幼稚園にしたら？」の意見が採用され、鬼たちは公園で遊ぶことなく5場面へ続く。
- 5 場面：幼稚園での豆まきを思い出しながら文章を考える。「強く投げたよね」「私泣いた」「怖かった〜」など実際に経験したことを思い出しながら書いていた。

最後に題名の決定である。鬼が冒険に行くから『ぼうけんおに』という題名がついた。

文章が出来上がりみんなで見ている。「あっ！日本の旗がなくなっている」1場面で冒険に出るとき描き加えた旗が2場面からないのである。そして2場面に出た血も3場面からなくなっていた。話し合いだ。結果、どちらも最後まで残すことになった。5場面には、豆まきに遭い放り投げた国旗と、幼稚園で治療を受けた絆創膏の絵が描き加えられていた。



次に示すのが『ぼうけんおに』の作品である。

ぼうけんおに



このまえおにたちが
にんげんのくににぼうけんにいきました。

にっぽんにすんでいるので
にっぽんのはたをもっていきました。

にんげんのくにはどんなところかなあ
なんだかわくわくします



おるいていくとおおきないしがあつて
ころんでしまいました。

ともだちがだいじょうぶといいました
そしてちができました。

でもがんばってあるきました。



「いえがあつたよ。」
「こんにちは。だれかいますか。」と
きいて おうちのとびらをあけたら
にんげんがまめをなげてきました。

おいそぎでにげましたが



みちにまよってかえれなくなったのです。

あるいていると
こうえんについていました。
こどもたちがゆうぐでたのしそうに
あそんでいました。
ぼくたちもあそびたいなあ
そこはようちえんだったのです。



ようちえんにいったら
まめをなげられました
「いたいよー。」
こどもたちのちからは
とつてもつよいです。
だけどこどもたちは
たくさんないてしまいました。
「なかよくなりたかったな。」
「こどもたちは あしがはやかったから
しょうがないね。」
とっておうちにかえりました。

<猫グループ>

- 1 場面：ここでは人間 1 人と猫 2 匹が登場する。まずは名前を何にするかで悩んでいる。クラスの友達と同じ名前じゃない方がいいとのこと。いろいろな名前を上げながら「ひなこ」と「ゆめ」に決定した。猫が人みたいな名前だから人間の名前は犬みたいな名前にしようということで「じょん」に決まった。内容は、次の場面が食事をしているところなので散歩の途中でお腹がすき、レストランに行くという文になった。
- 2 場面：ここには 1 場面でてきたじょんが存在しない。「じょんは？」と言われ「場所がないから描けない」と答えていた。そこで、猫しか入れないレストランにする話が出たが、H子の「みんなお腹がすいているのに食べられないのはかわいそうだわ～」の言葉に沈黙が続いた。先生の「じょんは何処に行ったの？」の声かけがヒントになりレストランに行かなかったのではなく行ったがその場にはいないという設定でお話しができた。
- 3 場面：ここでもじょんの姿は見られない。2 場面でトイレに行ったじょんがなかなか帰ってこないで猫たちは勝手に遊びに行ったのである。ここでは夕方になるのだが、「夕方だったら夕日があった方がきれいじゃない？」というG子の言葉に夕日を加えることになった。傍で子ども達が話している。「夕日ってあつ Payne よね」「顔が赤くなるよね」「どんどん大きくなるよね」
- 4 場面：ここではじょんが 2 人登場している。遠くで呼んでいるじょんと猫が思い浮かべているじょんである。あらすじはみんなで考えたものの文章はI子がほとんど書いている。

5 場面：最後に温泉に入る場面があるが、「じょんも温泉にいれたら？」というH子、G子の言葉にF男はじょんが温泉に入っている場面を描き加えている。「温泉で何をする？」G子が聞くとF男は「体重計る」なんてことを言っていた。それに女兒たちは「うちのお母さんも計るよ～」「何回も計るよね～」「ね～入る前と入った後も」と大笑いしている。F男は「お姉ちゃんはコーラ飲む」と言いながらみんなが見守るなかゆっくりと文字を連ねていた。

みんなで作品を見ている。すると女兒たちがF男の猫だけひげがないことに気付いた。H子が「おんなじ猫なんだからひげがないとおかしいじゃん」と少し怒って言った。F男は「いやだ」と答える。I子が「温泉で濡れてしょんぼりしていることでもいいんじゃない？」と助け船を出す。それにも応じない。沈黙のなかJ子が「何でひげがないの？」と聞くとF男はぼつり答えた。「剃った」。女兒たちは顔を見合わせて「な～んだ。そういうことか」と納得している。F男もほっとしたような表情ではにかんでいた。

最後に表紙作りである。表紙には登場する猫2匹以外に2匹の猫が出てくる。女兒4人が全員猫を折りたいと希望したからである。反論する子どもはいない。F男も誘われたが遠慮した。「散歩に行く途中に友達の猫に会ってバイバイしているところでもいいんじゃない」「いいね」「いいね」と即決である。題名は『ねこのおさんぽ』に決まった。

次に『ねこのおさんぽ』を紹介する。



ねこのおさんぽ



じょんはねこのひなことゆめとおさんぽにいきました。
いっぱいあるいて
おなかがすいてきました。
そしておいしいとひょうばんの
れすとらんにいきました



じよんとひなことゆめは
 パスタとサラダをちゅうもんしました。
 じよんがトイレにいったから
 ひなことゆめでたべました。

そして

じよんがおそいから ひなことゆめは
 どこかにあそびにいきました。



あるいていると そばにこうえんが
 あったので そこにあそびにいきました。
 ブランコであそびました。

ゆうがたになったので
 かえろうとおもいましたが
 じよんがいません。

すると



「ひーなーこー」
 「ゆーめー」
 ちいさいこえが
 どんどんおおきくなってきます。
 ひなことゆめはへんじをします。

「ニャーニャー」
 「ニャーニャー」
 「やっとみつけた。」
 とじよんがいました。



とちゅうでみんなで
 おふろにはいりました。
 ひなことゆめが
 たいじゅうをはかりました。
 じよんはからだをふきました。
 そしてこーらをのみました。

2月18日～ ⑧

朝や帰りの会など時間を見つけて発表（読み聞かせ）をした。自分たちで作った作品だが、照れや緊張、また、文字を読もうとするためにつまづきも見られた。しかし、友達が作った作品ということもあってか、みな真剣に聴いている。懸命に発表し終えたときの笑顔から安堵感、そして達成感・充実感を味わっていた。

V 結果と考察

2月10日 ①②

鬼グループの子ども達は、はじめ、希望の色を伝えるだけであった。なかなか決まらない様子の子供達に先生が落としたエッセンスは「どうしてその色がいいと思ったの？」であった。アメリカの子育てカウンセラー、ドロシー博士（1999）は『子どもが育つ魔法の言葉』のなかで、大人の思いで発言するのではなく、まずは子どもの気持ちを聞くことが大切だと随所で述べている。また菅原裕子（2007）も『子どもの心のコーチング』において子どもの話を聴くことはサポートの基本だと述べ、その利点を3つあげている。1つ目は子どもの情報を手に入れることができる、2つ目は子どもの存在を肯定することができる、3つ目が子どもとのいい関係を維持できるである。先生が「早く決めなさい」や「どうやって決める？」と結論を急がせるだけの言葉かけでは今回のような展開にはならなかったであろう。それぞれの思いを伝え合い、お互いの気持ちを理解することで自分の思いを変えることができる。相手を尊重しようという気持ちが生まれたのである。また、赤は強そう、ピンクは優しいという色と感情イメージの概念をそれぞれがもっていることも分かった。これは子ども達の大好きなTV番組、戦隊ヒーローそれぞれのイメージからくる影響だと考える。もう1人は赤鬼にしようと言われた時のB男は、自分の気持ちを認められ嬉しかったと思うがそれを断っている。優しい鬼の話で主人公の1人がピンクに決まり、「優しい」と「強い」は合わないと判断したからであろう。自分の思いだけではなく、周りの状況と関連づけて決断する思考ができていく。「折り紙もらってくる」の一言から活動への意気込みが感じられ、今回、自分の願いを通すことはできなかったが、自分なりに考えて出した結論なので後悔はないと推測した。

猫グループでは話し合いに参加できていない子どもに気付き、その子どもではなく周りの女兒にF男の様子を伝えた。先生の言葉を受けG子はF男が話し合いに参加できていないことを察知したのであろう。先生の“困っているのではないか”のなげかけに対して困っているかどうか、どうしたの？ではなく“何色の猫がいいか”を尋ねたのである。先生の言葉だけではなく、その背後にある意図を読み取れている証だ。その時のF男の姿と自分たちの姿を同じ空間としてとらえ客観的に見ることができた対応である。

折り紙に関しては、苦手な子どもには得意な子どもが教える場面もあり、子どもの教え方を観察してみると「手をばんぎーいってするときみたいに」とか「中からこんにちわって」「アイロンをかけるんだよ」など日常の生活を例に出していることが多い。想像力は豊かな経験から生まれ、想像と経験は依存関係にある（内田信子：『これからの子育ての提言』）と述べられているように子ども達は日常生活における経験が物事に対するイメージと繋がり、さらに言葉として表現することができるようになってきていることがわかる。

2月13日 ③④⑤

鬼グループについては、C子がまとめ役になりあらすじや場面と場面の繋がりを考えながら順

番を決めることができている。周りの様子をじっくり観察し、あまり発言しないE男も自分の順番が決まりほっとしたのか笑顔が見られ満足の様子だった。1番がいいと言ったA子も、C子、B男の意見を聞いてすんなりと順番を譲っている。ここでも相手の意見をよく聞き、前後、全体に目を向け思考する力の育ちがみられる。C子が理由を言わずD子のを1番にすると行ってたらどうなっただろうか。積極的に自分の意見が言えるA子。反論する可能性が高い。これまでの経験から、結論だけでなく理由を伝える大切さやどうしてそう思うのかを伝えることで話し合いがスムーズに行えることを学んでいるのであろう。

猫グループに関しては、それぞれが自分の作品に対する思いを熱く語っていた。気持ちが高まっていたのかF男の「温泉」に対して笑うという行動をとったが、楽しいと思ったのか可笑しいと思ったのか、そこにどんな思いがあったのかは分からない。先生はその思いを聞くでもなく、行動を論ずでもなく「みんなは温泉好き？」と温泉に関心を向けた。なぜ笑ったのか…それを聞き出すことでその場が重い雰囲気になるよりも、笑いがプラスの方向に展開できることのほうが環境作りには大切である。それからどんな気持ちだったかと内面の感情を引き出す言葉かけから猫の感情へと視点をずらしている。先生の一言で子ども達の会話に広がりが見られ温泉に対する感覚や相手の気持ちを察する力に繋がっている。

2月17日 ⑥⑦

鬼グループは散歩から冒険に内容が変わった。散歩の目的地を明確にしようとしたところから全体を見通してあらずじがはっきりしたのであろう。散歩なら手ぶらでよいが冒険なら何か持って行かなくては…と考えたところに散歩と冒険のイメージの違いが見えた。冒険は何かに挑むという感覚があるのであろう。しかし、優しい鬼がテーマであるところから金棒を持たせないのは子どもらしい発想である。日本に住んでいるから日本の国旗を持たせたところに愛国心を感じた。運動会での挑戦と万国旗が繋がっている可能性もある。幼稚園での豆まきの場面では経験したことを客観的に捉え「子ども達の力はとても強いです」「けどたくさん泣いてしまいました」と鬼の立場に立って上手に思いを表出できている。仕上がり後、最初から読んでいくうちにイラストに一貫性がない(国旗・血)点に気付けたのは、場面場面だけでなく1場面と全体を関連付けて見ることができたからであろう。

猫グループのお話しで面白いのは人の名前が「じょん」で猫の名前が「ひなこ」と「ゆめ」であるということだ。しかも、猫の言動が擬人化している。しかし返事は「ニャーニャー」だ。子どもならではの発想と言える。重ねて、人間のじょんが毎回登場しない点も面白い。じょんを描き加える場所がないという理由だ。先生の「じょんは何処に行ったの？」の声かけがヒントになり登場しない理由がトイレに行っているというのは現実的で日常の経験から導いたのだろう。4場面で、本を読むのが大好きなI子は、かぎかっこ「」を使うことができている。また、じょんも2人登場している。遠くで呼んでいるじょんと猫が思い浮かべているじょんとアイデアが面白い。“小さい声がどんどん大きくなってきます”という表現や「ひーなーこー」「ゆーめー」と語尾を伸ばすところから遠近の違いを理解しイメージできていることもうかがえる。F男がひげを描かなかった理由も面白い。それに納得している子ども達の感覚も豊かである。後藤恭子(2002)は人とのふれあいは人間の豊かな世界を体験する機会となり自己を形成する大切な場となると提言している。自分の描いた絵の意味をしっかりとっており、友達に指摘されても思いを曲げないF男、疑問点をなんとか解決しようと試みる女兒達、話し合いによって歩み寄る、分かりあう、これは協同で何かをするときでなければ体験できないことである。

岡田明(2016)は、聞く力を育てるためには保育者が良い聞き手になること、絵本やお話など言語文化とかかわりの持てる環境を用意すること、そして、考える、想像する力を育てるためには子どもの考えを尊重すること、行動を見守ること、受容すること、環境を整えることが大切だと述べている(『新訂 子どもと言葉』萌文書林)。また、『新時代の保育双書 保育内容ことば』には、子どもが言葉を獲得していくには、園生活のなかで分かり合える関係、受け入れあえる関係、時には本気でぶつかり合える関係が築かれていくことが必要になってくると書かれている。これらのことから子どもの言葉の発達には保育者・大人のかかわりが重要であり、友達との関係性が幅を広げると言えよう。

VI まとめ

今回、お話し作りを通して、子ども達の取り組みや言葉のやり取り、そのなかで何が成長しているのかを探ってみた。子ども達は日常のやり取りのなかで言葉を発し、受け止め、コミュニケーション能力や人間関係を築いている。言葉はそこで大きな割合を占めている。自分の思いを表出するには多くの言葉を知っていることも大切だが、単に言葉をどれだけ知っているかや話が上手にできるかではなく、それ以上に実感のこもった言葉をどれだけ獲得し表現できるかが友達とのやり取りのなかで大切であることがわかった。いろいろな体験から様々な感情と出会い、自分なりの言葉で思いを伝えようとするのが大事なのである。今回、自分たちの感情や意志などを言葉で伝えたり相手の気持ちを理解したりと、伝え合う喜びを味わうことにより表現意欲が増す姿がいたるところで見られた。これが豊かな言語表現に繋がるといえる。同時に活動への興味も高まった。それは、友達の作品について真剣に話を聞いたり質問したりする姿からうかがえる。友達の話に共感することでさらに話が盛り上がる。語彙の獲得やイメージの広がりができるのである。表現力や想像力、美しい言葉等に対する感覚などは言葉かけや教えのみで育つものではなく、経験が土台となり子どもが主体的に積極的に発見し感じていくものだといえる。そう考えると幼児期の直接体験がどれほど大きな意味をもつのか計り知れない。

言葉には伝え合いから育つコミュニケーション、思考から生み出す思考力、行動を調整しながら達成していく調整力、自分の気持ちを伝える自己表現力、物や行為を言葉で表現する意味づける力(『保育者をめざす人の保育内容「言葉」』から)があるとされている。これからの未来を生き抜くために必要な力である。子どもの言葉は自然に育っていくわけではない。豊かな言語表現ができるようになるためには先生の一言で問題が解決に向かったり話が広がったりしたことでもわかるように、やはり私達大人のかかわりが必要である。と同時に子ども同士が密にかかわり思いを表出できる雰囲気や環境づくりも欠くことができないものである。大人がどんな環境を準備し、何を体験させ、どのような言葉でどのようにかかわっていくかが、子どもの言葉や思考の発達をどれだけ伸ばすかに繋がる大きな鍵となるのである。

文献・参考資料

幼稚園教育要領解説 平成 20 年 10 月 文部科学省

ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス、石井千春＝訳（1999）『子どもが育つ魔法の言葉』PHP

菅原裕子（2007）『子どもの心のコーチング』PHP文庫

内田信子（1998）『これからの子育ての提言』小田豊・服部祥子・無藤隆監修 ひかりのくに

後藤恭子（2002） 絵本と紙芝居から見る心の教育 35.19－37

岡田明編（2016）『新訂 子どもと言葉』萌文書林

成田徹男編（2015）『新時代の保育双書 保育内容ことば第 2 版』（株）みらい

駒井美智子編（2012）『保育者をめざす人の保育内容「言葉」』みらい